

グローバル・リーダー育成 スウェーデン研修プログラム 報告書

23-166066

教育学研究科 総合教育科学専攻
臨床心理学コース 修士2年 佐藤遊馬

私はこの度、2月18日(日)～2月25日(日)に行われた「グローバル・リーダー育成、スウェーデン研修プログラム」に、学校教育高度化・効果検証センターの「若手研究者育成プロジェクト」の一環として参加させていただきました。

研修プログラムの内容と私が得た学びについて、以下の通りご報告申し上げます。

2月19日(月) Joint Seminar on Education for Diversity

2月18日(日)に日本を出発し、その後の3日間(19日～21日)はストックホルム大学での研修会に参加しました。このセミナーは東京大学・ストックホルム大学・ユヴァスキュア大学(フィンランド)の3校合同で行われ、各大学で教育学を専攻する学生・教員がそれぞれの研究について発表し、多様性という軸において議論を深めるということを主題としたものでした。

初日にあたる2月19日は午前中に各校の大学紹介、学生生活紹介を行い、午後はストックホルム大学の学生によるキャンパスツアーが行われました。

2月20日(火) 現地の国際高校(Globala gymnaiset)訪問

2日目は2つのグループに分かれ、現地の小学校もしくは国際高校を訪問しました。私たちのグループはLGBTを研究テーマにしており、思春期にあたる高校生が性の多様性についてどのような教育を受けているのかという関心から、国際高校を訪問するグループを選択しました。

現地では教員による学校説明の後、在校生による学校案内が行われ、その後在校生を交えて小グループでディスカッションが行われました。ディスカッションの際にグループメンバーが「性の多様性についてどのような教育を受けているのか？」という旨の質問をしたのですが、それに対して「特別な教育を受けているわけではないと思うけど、当事者の友達は何人かいる。」という返答が自然な様子で返ってきたことを印象的に記憶しています。

その後は在學生と一緒に食堂で昼食をとりました。高校でどのような勉強をしているのか、英語で生き生きと語り、「日本の高校生は政治や経済の話をあまりしないのが一般的」という話をすると、「とても大事なことなのに」と驚いていました。

2月21日(水) 国際シンポジウム

3日目の2月21日は国際シンポジウムとして、午前は全体での教員発表、午後は小グル

ープに分かれての学生セッションを行いました。夜にはファカルティハウスでレセプションが行われました。

私にとって初めての英語での発表でしたが、フロアからは日本の大学における LGBT の現状に関する素朴な疑問や、各大学における LGBT に対するサポート資源の紹介など、小グループならではの双方向的な議論が展開され、非常に学びの多い時間を過ごすことができました。

他学生の発表も、臨床心理学の文脈では触れる機会のないテーマが多く、その点でもよい刺激を受けることができました。

2月22日(木) UNESCO 本部訪問

ストックホルムでの全日程を終了した後はパリへ移動し、その日の午後に UNESCO 本部を訪問しました。

UNESCO の教育部門で活躍されている日本人職員 3 名に直接お話をうかがうことができ、2 時間という短い時間ではありましたが、非常に刺激的な時間を過ごすことができました。

UNESCO という組織が国連の中でどのような立ち位置にあり、どのような役割を担っているのかといった至極基本的であろう内容から解説して下さったこともありがたかったですし、御三方が今に至るそれぞれのルーツについて語って下さったことも、とても興味深いものとして心に残っています。

2月23日(金) OECD Boulogne 訪問

5 日目にあたる 2 月 23 日は OECD の別館、OECD Boulogne を訪問しました。ここでも日本人職員の方からのお話をうかがったのですが、様々な国から参加している学生インターンが同席し、現在 OECD で動かしているプロジェクトなどについて話してくれたことが印象的でした。OECD では 2030 年を一つの節目として、世界規模での教育について問題提起をし、教育に関する持続可能な開発目標を提言しているそうです。

同年代の学生インターンがこのような世界的なプロジェクトに携わっていることが非常に刺激的で、自らの専門性や問題意識を問い直す良い機会になりました。

その後、2 月 24 日(土)にパリを出発し、2 月 25 日(日)日本着、研修プログラムの全日程を終えました。

私にとっては初めての海外経験となった本研修ですが、スウェーデンとフランスという 2 つの国において様々な刺激を受けることができ、自身の英語学習に対するモチベーションを得るとともに、多様なバックグラウンドを持つ方々とのディスカッションから、自身の民族性や、それに関連した専門性を強く意識する機会となりました。今後も多様性に関して、日本国内に囚われない研究を意識して展開していきたいと考えています。